

明治学院歴史資料館 ニュースレター No.5

明治学院歴史資料館発行
2014年3月



目次

- ・「聖書和訳と明治学院」展と聖書和訳デジタルアーカイブス
- ・『明治学院百五十年史』上梓
- ・寄贈・新着資料紹介
- ・横浜開港資料館共催「宣教医 ヘボン展」
- ・協力・そのほか
- ・ホープカレッジ140年前の日本人留学生

2013年11月1日

歴史資料館展示室 リニューアルオープンいたしました

明治学院歴史資料館は1998年に大学図書館から独立し、記念館2階に事務室と展示室を構えました。

記念館は、かつては神学部校舎兼図書館として使用された建物で、島崎藤村もこの場所で学び卒業してきました。明治学院は記念館を大切に保存していく一方、歴史資料館展示室を一般公開してきました。しかしながら、資料館展示室内を見学するためには、事務室の入り口を一旦横切って通っていかなければならないことや、2階まで階段をのぼらなければならないこともあり、足腰に不安のあるかたや車椅子のかたには、大変ご不便をおかけしておりました。

そこで、2013年の夏に改修工事を行い、2階にあった歴史資料館展示室は記念館1階へ移設。歴史資料館事務室は、隣接するインブリー館（国の重要文化財）1階へと引っ越しました。

記念館の展示室移設工事は、港区の有形文化財の指定を受けている建物の工事となるため、通常の建物改修工事とは違い、いつくもの制約をクリアしたうえで、建物の保全に神経を注がなければならない困難な工事となりました。

展示室リニューアルオープンは当初の予定から大幅に遅れたものの、2013年11月1日からの「東京文化財ウィーク」開催と同時に、一般公開を開始することができました。展示室内は、パネル展示をメインとした企画展示スペースと常設展示スペースを設けており、

現在、企画展示は「聖書と明治学院」を開催中です。常設展示スペースには、ヘボン博士の手稿、島崎藤村作詞校歌の掛け軸、賀川豊彦の日記等を展示。また、明治学院白金キャンパスへの変遷を物語るジオラマをパネル説明とともに展示しています。

明治学院歴史資料館 桑折美智代

■明治学院歴史資料館 展示室■

白金キャンパス 明治学院記念館1階

開館時間：9：00～16：00（月～金）

展示室は学内外のどなたでもご覧いただけます。

ぜひお越しください。



聖書は、現在までに各教派共同訳が4回日本語翻訳されており、明治学院の人々はこの聖書の日本語訳の歴史に大きな役割を果たしている。

最初の翻訳“明治元訳”では、明治学院創設者のJ.C.ヘボンが旧約聖書翻訳委員長、S.R.ブラウンが新約聖書翻訳委員長となり、日本語の研究と解析により成し遂げた。近代日本語訳である『改訳 新約聖書』にも明治学院から翻訳委員として参加しており、戦後には都留仙次学院長が委員長として当用漢字と現代かな遣いによる現代日本語訳『聖書 口語訳』を刊行した。

現在使われているプロテスタントとカトリックとの共同訳である『聖書 新共同訳』にも翻訳委員を出し、また個人訳でも他にないユニークな試みを戦前から行っている。

歴史資料館では、明治学院創立150周年記念として日本の聖書翻訳史と明治学院の人びとの働きをわかりやすく展示した「聖書と訳と明治学院」展を開催し、明治学院大学図書館の「聖書と訳デジタルアーカイブス」の制作に協力した。

■ 聖書の和訳は日本語研究から

聖書と訳の歴史とは、日本語の変化の歴史と異文化の概念理解の歴史である。

明治中期までの日本人は聖書の神学的理解が十分ではなく、聖書翻訳は困難であった。このため聖書の和訳は外国人宣教師による日本語の研究と解析から始まった。

これらの日本語研究出版物は、近代日本語研究に現在も多く利用されている。明治学院関係者の日本語研究出版物は、大学図書館のデジタルアーカイブス「先人の輝き」に掲載され研究者の利用も多い。

▽日本語辞書の編纂

J.C.ヘボンは、Webster辞書を目標に日本語を英語で解説した近代日本語辞書『和英語林集成』を三回編纂した。日本人編纂の近代的国語辞典は、この後明治中期から発刊されていく。

▽日本語会話書の編纂

S.R.ブラウンは、最初の本格的日米会話書“Colloquial Japanese”を文法解説と共に出版した。同一の英文に日本語の通常表現と丁寧な表現の二種類がつけられている。

▽日本語文法書の刊行

G.F.フルベッキは、日本語文法書“A Synopsis of the Conjugations of the Japanese Verbs, with Explanatory Text and Practical Application”を、W.インブリーは、“Handbook of English-Japanese Etymology”と“Wa and Ga”を著している。

現在の近代日本語文法は、このような西洋言語学による解析をもとに、幕府開成所、大学南校出身である大槻文彦編纂の『言海』（1889年刊）中の文法解説「語法指南」により体系化された。



明治学院大学所蔵の貴重聖書

■ 聖書の和訳は 日本語の変化の歴史と共に

<先行訳聖書>

鎖国の続く時代から、アジア布教中の宣教師の間で翻訳が研究された。1837年ギュツラフが漂流民の協力で「ヨハネ福音書」を、1855年にはベッテルハイムが琉球語による「ルカ伝」を翻訳した。この歴史的な初訳はJ.C.ヘボンとS.R.ブラウンらが来日の際に持参し、明治学院神学部にも所蔵され、現在は東京神学大学図書館の所蔵となっている。二人はキリスト教禁制の中で日本語研究を行い、英語聖書と漢訳聖書から「四福音書」を和訳したが、版木を刻成すれどもキリスト教禁制下の日本では印刷できず、版木を上海に運んで1000部を刷りあげた。

<初の全聖書日本語化——明治元訳>

1873(明治6)年に“切支丹禁制の高札”がはずされキリスト教が黙認されると、各教派共同の翻訳事業が加速された。

新約聖書は、S.R.ブラウンを委員長として1880(明治13)年に全訳終了し、旧約聖書は、J.C.ヘボンを

委員長として1887(明治20)年に訳出され、ここに聖書の初の全訳が果たされた。「詩編」はG.F.フルベッキの訳による。まだ聖書の神学的理解が日本人には十分でなく、宣教師たちは日本語を研究し日本人の協力を得て和訳を成し遂げた。

この時代は、地域や身分、職業、男女による言葉の差が大きく、話し言葉と書き言葉も異なり、漢語調でなければ教養がないとされていた時代であった。宣教師たちは全ての人に理解できる平易な言葉を目指したが、知識層である日本人委員は漢語調を求め、翻訳には漢訳聖書の影響が多く残った。

＜近代日本語訳——新約聖書 大正改訳＞

明治20年代以降、近代日本語が成立する。言文一致体や新体詩が出てくる時代となると初代新約聖書の言葉は検討が必要となり、“大正改訳”が1917(大正6)年になされている。

この改訳新約聖書とJ.C.ヘボンたちの旧約聖書を合わせて1955(昭和30)年まで広く使われたが、『聖書口語訳』が出版されると『聖書 文語訳』と名前を変えて販売された。

＜現代日本語訳——口語訳＞

太平洋戦争後の日本語には大きな転機が訪れた。当用漢字と現代かなづかいの制定である。これにより聖書は全改訳を余儀なくされ、現代日本語としての『聖書 口語訳』が1955(昭和30)年に刊行された。

明治学院学院長の都留仙次が中央委員長と旧約の翻訳委員長を兼務し、多くの作業が御殿場の山荘でなされた。学長村田四郎もコンサルタントとして参加した。

＜新共同訳——プロテスタントと

カトリックとの共同訳＞

キリスト教は一つであり、共通に使える聖書を原典より訳そうという世界的思潮から、村田四郎の参加する共同訳聖書可能性検討委員会は、「必要かつ可能」との結論に至り、1978(昭和53)年に『新約聖書 共同訳』が訳出され、さらに発展して『聖書 新共同訳』として1987(昭和62)年に完訳された。この聖書が現在最も広く使われている聖書である。

■個人での和訳のユニークな取り組み

▽カラザース

『略解新約聖書馬太伝・馬可伝』1875(明治8)年

カラザースは築地大学校や築地6番神学校で教えた長老派の牧師である。嘉魯日耳士(カラゾルス)発行と記されているが、実質翻訳編集は加藤九郎が行い、日本人信徒が行った初の聖書翻訳といえる。

▽井深梶之助(明治学院第二代総理)

『新約聖書馬可(マルコ)伝 俗話』1881(明治14)年

翻訳に参加した明治元訳をもとにしながら、言文一致体としてのはじめての試みである。この訳は大正改訳が出るまで16版も重版された。

▽永井直治(明治学院神学部卒業)

『新契約聖書』1928(昭和3)年

内村鑑三は初版序文で「君は日本人として聖書の日本の最初の試みを為したのである」としており、英訳聖書・漢訳聖書・和訳聖書の影響を受けず、日本人単独でギリシア語原典からのみ翻訳した聖書として特筆され、いまでもギリシア語聖書の研究には参照されている。この聖書は1932(昭和7)年の第3版まで改訂され、戦後は1977(昭和52)年の修正改版まで発行されている。

▽渡瀬主一郎・武藤富男

『新約聖書(口語)』キリスト新聞社 1952(昭和27)年

賀川豊彦はギリシア語原典に忠実で誰もが読んでわかる聖書をめざし、ギリシア語聖書を研究する渡瀬主一郎と武藤富男(のちに明治学院学院長)に和訳を命じた。1951(昭和26)年に始め、現代日本語としてわかりやすく品位を保ち朗読に適した表現に訳され、1952(昭和27)年10月に完成した。

■日本最初の特殊教育教科書は 明治学院関係の人びとの手で作成

ヘボン式のローマ字記述は、アルファベットの凸字本により、盲人への文字の道を開いた。1875(明治8)年築地病院院長で築地大学校教員であったヘンリー・フォールズ宅で古川正雄、津田仙、中村正直、岸田吟香、ボルジャルトが訓盲組織の楽善会を作り、ヘボン式ローマ字で書かれた「ヨハネ福音書第9章」の凸字本を制作した。日本点字の考案はこれより遅く1890(明治23)年に現在の6点式点字が採用され、1901(明治34)年に官報に公表された。

松岡良樹(歴史資料館研究調査員)

「聖書和訳と明治学院」展

- 2013年12月2日(月)～2014年12月26日(金)
 - 明治学院記念館1F 歴史資料館 展示室(白金キャンパス)
 - 平日 9時～16時 ●入場無料
- 聖書和訳史のパネルやヘボン・ブラウン共訳聖書はじめ、貴重書とされている聖書などを展示中。どなたでもご自由に見学いただけます。

貴重な聖書が全ページ閲覧できる！

聖書和訳デジタルアーカイブス

日本で初めての聖書和訳のデジタルアーカイブスを明治学院大学図書館と歴史資料館が協力し、2013年12月より公開しました。

3万2000枚を超える聖書関連のデジタル画像を年代別検索、聖書箇所での検索などができ、新共同訳との比較もできます。どうぞご利用ください。

●ご利用は下記URLへアクセスしてください●

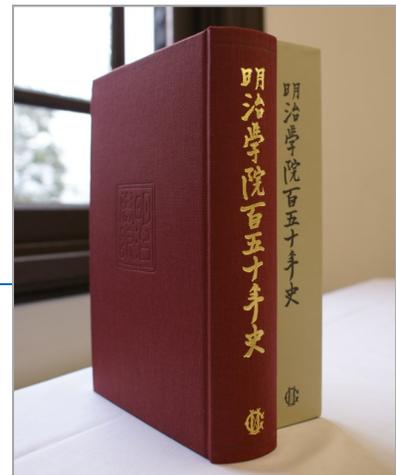
明治学院大学図書館デジタルアーカイブス
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.html>

『明治学院百五十年史』上梓

2013年、創立150周年を迎えた明治学院。
横浜のヘボン塾からはじまり、築地のミッションスクール時代、
そして白金でのキャンパス統合と発展。
明治学院の150年間の歴史が改めて編纂されました。

寄稿 ◆ 『明治学院百五十年史』を完成して

『明治学院百五十年史』編集委員会
委員長 中島 耕二（教養教育センター客員教授）



表紙には校印、裏表紙には所蔵印を押した

このたび、明治学院創立150周年記念事業の第一に掲げられた、『明治学院百五十年史』（本編と主題編の全二巻）が完成しました。思えば2006年6月に「明治学院百五十年史」編集準備委員会が招集されてから、足掛け8年におよぶ長期プロジェクトでした。編集委員はスタート時の9名から逐次増員され最終的に13名となり、このメンバーによって約二ヶ月に一回のペースで編集委員会が開催され、2013年3月に原稿のドラフトが出揃うまで、3度の合宿を含め43回の委員会が重ねられました。

この『明治学院百五十年史』は既刊の学院史と比べ編集上二つの大きな相違点がありました。一つは、従来、「学院前史」として扱われてきた1863(文久3)年のヘボン塾開設から、1877(明治10)年の東京一致神学校の創立までの14年間は、「正史」となったことです。これは、2000年10月開催の第473回定期理事会で、明治学院の創立年次を上記の東京一致神学校の創立年からヘボン塾の開設年に変更することが確認されたことによります。そのため、本書ではこの期間の詳しい記述が従来にも増して求められることになりました。

もう一点は編集委員13名全員が執筆者となったことです。各編集委員の専門知識を活かそうという主旨でしたが、結果は、節あるいは項ごとに叙述のスタイルおよび内容に差異が生じ、年史として統一性を欠くという問題が発生しました。そのため記述に一貫性を持たせ、整合性の取れた理解し易い文章に編集し直す作業に、相当の時間と労力が費やされることになりました。執筆者の多数化は今後課題を残しました。ちなみに既刊の学院史は特別な項目を除いて、執筆者は1名ないし2名でまとめられています。

また、1977(昭和52)年に『明治学院百年史』が刊行されて以降、本格的な学院史が編纂されてこなかったこともあり、史料の収集・整理が十分でなく、早急に歴史資料館のアーカイブ機能の改善が必要という課題も浮き彫りとなりました。

こうした茨の道でしたが、編集委員個人あるいはグループで資料収集を進めるとともに、編集委員会は、歴史資料館と連携して台湾留学生（王金河、蔡玉柱の両氏）、「戦中・戦後」および「昭和三〇・四〇年代」に学院に学んだ同窓生さらに元学長（森井眞、金井信一郎の両氏）等へのインタビュー、加えて韓国、台湾、アメリカへの海外取材出張など、精力的に執筆のための基礎作業を重ね、さらにその調査結果を編集委員会で発表し、委員相互に批評し合い草稿への反映を心掛けました。また、その一部は『明治学院歴史資料館資料集』の一冊として活字化も図りました。

『明治学院百五十年史』は、開国によって始まった日本の近代化とともに歩み続けてきた本学院の長い歴史と伝統を、温かい目と同時に客観的な目をもって描写したものです。是非、多くの皆さまに読んで戴き、明治学院をより広く、深く知って戴くよう願っております。また、本書が学院の今後の更なる発展と充実のために、その指針となる「建学の精神」の源泉として役立つことを祈っております。

最後に、本書はもとより編集委員会メンバーだけでまとめることが出来たものではなく、「主に在って一つ」であるオール明治学院および関係各機関の協力・支援があつてはじめて完成を見たものです。すべてに感謝を捧げたいと思います。

『明治学院百五十年史』概要

『明治学院百五十年史』は全二巻の構成であり、学校史を中心に記載した「本編」約770頁と文学や音楽、美術、東アジアなどをテーマ別に記述した「主題編」約320頁からなる。

編集は明治学院百五十年史編集委員会が担当し、頒布は法人事務局法人課である。

明治学院の発展は、大きく分けて4つに分けられる。

- ①ヘボン塾とブラウン塾を中心とする「横浜の宣教師の塾時代」
- ②東京一致神学校と東京一致英和学校を中心とする「築地ミッションスクール時代」
- ③白金に統合移転し、明治学院として日本の学制に入る「白金の時代」
- ④東村山・横浜戸塚にキャンパスを広げる「戦後の拡大時代」

従来は横浜の塾時代は前史であり築地時代から創立年を数えていたが、他の関連学校との創設とも矛盾をきたしていた。横浜時代は極めて重要な時代であり優秀な人物も多数輩出し、横浜外国人居留地39番跡のヘボン記念碑には“創設者なり”と記載されている。

このような背景から2000年に創立を横浜時代から数えることとし、従来の不十分な説明と各種の矛盾を解消することとなった。

●『本編』の内容

<巻頭カラーページ>

各時代のキャンパスの風景とイメージを伝える写真と横浜開港資料館に最近寄贈されたヘボン塾の記念撮影写真や築地居留地の鳥瞰スケッチも掲載した。

<本文>

- 序章 文学のなかに登場する明治学院の風景
- 第一章 幕末・維新から明治へ
- 第二章 明治学院と白金の丘
- 第三章 大正デモクラシー下の明治学院
- 第四章 昭和戦前期——苦難の道を歩む
- 第五章 戦後復興から高度経済成長へ
- 第六章 拡大から充実した教育を目指して
- 第七章 新たに世紀を拓く
- 第八章 明治学院高等学校の歩み
- 第九章 明治学院中学校・明治学院東村山高等学校の歩み
- 第十章 テネシー明治学院高等部の歩み
- 第十一章 世紀を超えて—創立一五〇周年を目指し

●『主題編』の内容

- 第一章 文学と明治学院
- 第二章 芸術・美術と明治学院
- 第三章 音楽と明治学院
- 第四章 東アジアと明治学院

●装丁

装丁は学術書の体裁をめざし、題字は校歌の島崎藤村の文字を基礎に大日本印刷の秀英体開発室の協力を得て作成した。見返し紙には島崎藤村の自筆校歌を施し、本文用紙は北越紀州製紙の淡クリームキンマリを使用。広辞苑を製本する牧製本による製本で、糸綴じ、キャラコ使用の上装丁とした。背のカーブが美しく、経年変化に強い製本となった。

松岡良樹（歴史資料館研究調査員）

『明治学院百五十年史』編集委員会

【委員長】中島耕二（教養教育センター客員教授）

【前委員長】遠藤興一（社会学部名誉教授）

【副委員長】播本秀史（文学部教授）

【委員】岡村淑美（明治学院高等学校教諭）
加藤拓未（歴史資料館研究調査員）
佐藤飛文（明治学院中学校・東村山高等学校教諭）

田丸 修（明治学院高等学校教諭）

辻 直人（歴史資料館研究員）

手代木俊一（元歴史資料館研究調査員）

原 豊（元歴史資料館研究調査員）

丸山義王（同窓会）

村上文昭（キリスト教研究所協力研究員）

渡辺祐子（教養教育センター教授）

（五十音順）

【顧問】大西晴樹（学院長）

鶴殿博喜（学長）

【事務局】明治学院歴史資料館

松岡良樹 後藤多麻実

『明治学院百五十年史』 編集委員感謝会

2014年2月14日に完成のお祝いと編集委員感謝会が行われました。学院長、大学長ならびに理事や関係者の方々に列席いただき、各委員へ感謝状が授与されました。



寄贈資料紹介

都留仙次 聖書口語訳関連資料 など

明治学院第6代学院長・都留仙次先生のご子息都留和夫様より、都留仙次関連資料をご寄贈いただきました。とくに聖書口語訳関連資料は、所蔵している口語訳原稿に加え聖書和訳史関連の貴重な資料となりました。



都留仙次 (つるせんじ) 1884～1964年

大分県生まれ。東山学院、明治学院高等学部、明治学院神学部を卒業。さらにニューヨークのオーバン神学校、英国エジンバラ大学に留学。明治学院の教授、高等学部長、神学部長、中学部長を歴任した。明治学院退任後、フェリス女学院の学院長を務める。

神学にも精通していたため、旧約聖書改訳委員会委員長、新約聖書改訳委員となり、聖書の口語訳事業に尽力した。この間も明治学院理事や同窓会長を務め明治学院との縁は長きにわたる。1957(昭和32)年には明治学院第6代学院長に就任。学院長を退任後は、講師として学院へ出講、日本基督教団原宿教会牧師、日本聖書協会理事などを兼任した。1964(昭和39)年、80歳の誕生日の朝、原宿の自宅にて急逝。原宿教会での密葬の後、明治学院、フェリス女学院、女子学院、日本聖書協会、日本家庭聖書会合同による葬儀が明治学院チャペルで行われた。

■改訳『口語訳 聖書』の完成

新約聖書は大正6年に改訳されたが、昭和になってから旧約聖書も改訳すべきという動きが出て1942(昭和17)年に聖書改訳中央委員会が組織された。都留仙次が委員長となったが、戦争の影響などにより一部を除き完成に至らないまま改訳事業は中断された。

戦後、日本語の当用漢字と現代かな使いが制定されたため、聖書は全改訳が必要とされ本格的に改訳事業が再開された。都留仙次は旧約聖書改訳委員会委員長と新約聖書改訳委員を務め、後に明治学院学院長・学長となる村田四郎も新約の当初の委員長を務めた。改訳作業は、東京・銀座の聖書協会の一室や夏場は涼を求めて御殿場の二の岡荘で合宿して行われた。新時代にふさわしい現代語訳をされた『聖書 口語訳』は、1954(昭和29)年、1955(昭和30)年と続けて新約・旧約ともに完成、刊行された。

寄贈・聖書改訳関連資料

●聖書協会や二の岡荘での翻訳作業などの写真 24点

翻訳作業や委員の姿、秩父宮邸を訪ねた際の写真などがあり、当時の様子を知るための貴重な資料である。

●二の岡荘より送ったはがき含む手書きのはがき 77点

二の岡荘の合宿の際に東京の自宅にいる妻子に送ったものを主に、ほか出張先などから送ったはがき、妻・芳子宛て22点とまだ子供だった和夫氏宛て55点。消印は1951(昭和26)年～1959(昭和34)年となっている。他の翻訳委員の名前や、翻訳作業の様子も読み取ることができる。また和夫氏宛てのものには合宿所での出来事をイラストも交えており、都留仙次の人柄がうかがえる。現在、「聖書和訳と明治学院展」の資料として、はがきの一部を公開をしている。

寄贈・その他

- ・東山学院～明治学院学院長～同窓の写真など 87点／小アルバム1点
- ・日本語とヘブライ語で書かれた直筆のメモ
- ・『日本基督教の将来』(1919年3月20日)草稿ノートのコピー 1冊
- ・『都留仙次先生葬儀次第』(1964年2月1日)コピー
- ・『明治学院同窓会報』創刊号、11, 12, 13, 15, 16, 17, 18, 19号 計9冊
- ・『明治学院神学部一覽明治三十九年五月改正』都留仙次の直筆と思われるメモ書きあり1冊
- ・『80 YEARS OF CONCERN MEIJI GAKUIN 1877-1957』1冊
- ・1963年、原宿教会青年会誌『若輩』への寄稿文「回顧・少年時代／長崎遊学」のコピー
- ・『日本基督教団 原宿教会記念雑誌 100年の歩み』(2012年5月27日刊) 1冊
- ・説教「真の羊飼」の録音CD 1962年5月6日 於 原宿教会



1952年8月、御殿場・二の岡荘にて
上：入り口の前での委員らの記念写真
下：翻訳作業中の風景

小崎弘道『基督教の本質』の英訳原稿

小崎弘道著『基督教の本質』（1911年 警醒社・初版）を英訳した原稿と思われる資料を2点、小崎弘道先生の曾孫にあたる株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所の芹野与幸様よりご寄贈いただきました。

小崎弘道（こざきひろみち）1856～1938年

牧師、神学者。熊本藩士の家に生まれ幼少時から藩校の時習館で漢学と武芸を学んだ。15歳で熊本洋学校に入学。儒教主義を貫いていたが、キリスト教や聖書について学ぶ友人らの熱心な姿や教師L. L. ジェーンズの祈祷に感銘を受け、1876(明治9)年に同師より受洗。1879(明治12)年、霊南坂教会の前身の組合教会を設立。1880(明治13)年には井深梶之助、植村正久らと東京基督教青年会（日本初のYMCA）を創立し会長となった。1890(明治23)年に新島襄の後を継いで同志社英学校校長・社長となりアメリカン・ボードからの独立に尽力。その後霊南坂教会牧師や明治学院神学部講師を務めた。日本のキリスト教界の指導者として名高い人物であり、著書も多数ある。

寄贈資料について

- ・タイプライター打ちと手書き、記された年代も異なる原稿の2点（それぞれ200ページ前後）
- ・表紙には“The Essence of Christianity” Original by Dr. Hiromichi Kozaki formerly President of Doshisha, Kyoto Translated by W. E. Hoffsommer Meiji Gakuin, Tokyo と記されている。
- ・タイトルから始まり、序文、目次、本文と原本のままの順に英文で訳されている。

小崎弘道自伝『七十年の回顧』の「五・『基督教の本質』の出版」項に「又明治学院教授であったホブサンマーは、此書が只日本の基督信徒に有益なるのみでなく、欧米の信徒をも裨益する事の少なからざるべきを信じ、英訳して米国にて出版せんとすの計画を立てたが、不幸にも朝鮮旅行中に死去したので志を果たさなかつた、其原稿は恐らく遺族の手許に存することと思ふ」と書かれており、今回の資料が「其原稿」だと思われる。調査継続中。

洋楽鑑賞部の資料

2013年12月に本歴史資料館の呼びかけに応じて、本学卒業生の川口伸一様より洋楽鑑賞部（以下、洋鑑と略す）に関する資料をご提供いただきました。

洋鑑とは？

「洋楽鑑賞部」は、1947(昭和22)年12月に西洋のクラシック音楽を愛好する学生たちを中心に結成されたクラブ（部長教授：斎藤茂夫）である。活動の中心は、高級なステレオによる良い音質で、クラシック音楽のレコード鑑賞を楽しむことに置かれた。1960年代には100名を超える大所帯となり、クラシック音楽の勉強会や白金祭でステレオコンサートを開いたほか、著名な音楽家や、NHK交響楽団や読売交響楽団など有名オーケストラを招聘し、大規模な演奏会も企画するなど、その活動は多岐に渡った。1985(昭和60)年に在籍部員の減少により、その活動は終息している。

寄贈資料の報告

寄贈された洋鑑の資料は写真11点、演奏会チラシ2点、演奏会プログラム1点、書類資料3点の計17点である。写真は11点のうち、当時の活動の様子を写したものが8点、そして2009年にアルカディア市ヶ谷で開催された「洋楽鑑賞部創立60周年記念祝会」の写真3点がある。当時の活動の様子を伝えるものには（1）1962年の夏合宿の写真1点、（2）1962年10月22日に共立講堂で行われた「明治学院創立85周年記念NHK交響楽団特別演奏会」の写真4点、（3）1963年8月に福島県で行われた夏合宿と小学校でのステレオコンサートの写真3点があり、渡欧前のN響指揮者・小澤征爾の写真も残っている。

洋鑑主催演奏会の資料は、上記の「創立85周年記念演奏会」のチラシと、1963年10月21日に開催された「明治学院前身へボン塾生誕100周年記念、読売日本交響楽団特別演奏会」（於：厚生年金会館）のチラシとプログラムである。そして、書類資料は、洋鑑の歴史を伝える「活動年表資料」と、創立60周年記念祝会の「ご案内」と「式次第」である。

現在、明治学院歴史資料館では、学生が行っていた音楽活動に注目し、戦後の学内における音楽系クラブやサークルに関する資料の収集を行っている。資料に心当たりがある場合は、本資料館へのご提供（現物でなくコピー資料でも）いただくと幸いです。

加藤拓未（歴史資料館研究調査員）

キリスト教学校教育同盟百年史資料

今回寄贈となった本資料は、2012年5月に発行された『キリスト教学校教育同盟百年史』編纂のために各学校から収集された原資料またはその写本である。

この同盟は、井深梶之助（明治学院）や本多庸一（青山学院）らが、学校での宗教教育を禁じた文部省訓令第十二号に反対する中で、各学校と連携を作り協力していくために「基督教教育同盟会」として1910(明治43)年に組織し、1922(大正11)年には「女子基督教教育会」と合併した。現在は「キリスト教学校教育同盟」として290法人が参加している。

明治学院からは、初代会長に井深梶之助（明治学院第2代総理）はじめ、田川大吉郎（第3代総理）、矢野貫城（第4代学院長）、村田四郎（第5代学院長）、久世了（第11代学院長）らが理事長（会長）を務めている。

資料は約本棚二本分であり、目録を作って公開する予定である。

そのほか

ご寄贈いただきました資料の一部をご紹介します。ご寄贈いただきました方々へ感謝いたします。

卒業生・岩田正樹様より 勤労奉仕関連資料

・『千葉日報』1983(昭和58)年2月28日記事（縮刷版コピー）／『成田市史 第30号』／『コミュニティ成田 夏季号 NO.44』（コピー）

卒業生・孫田俊夫様より ・「明治学院校歌／あかつきに」収録レコード（1952年コロムビアレコード発売）

学院長室企画課より 『明治学院創立150周年記念 学生生徒による演奏会』関連

・パンフレット／チラシ／2013年11月9日録音・画 於 東京オペラシティコンサートホール CD、DVD 等

明治学院大学図書館附属 日本近代音楽館より 『五線譜に描いた夢 日本近代音楽の150年』関連

・図録／新聞広告（日経新聞）

明治学院大学校友センターより 『明治学院創立150周年記念チャリティーコンサート A Song For Japan』関連

・プログラム／チラシ／明学EXP02013企画実施報告書／2013年6月16日録音 於 白金校舎チャペル ブルーレイ、CD

明治学院歴史資料館 秋の講演会 開催いたしました

明治学院大学キリスト教研究所・横浜プロテスタント史研究会 共催

明治学院創立150周年記念シンポジウム 「ヘボン博士を語る」

2013年11月16日(土)15:00～

明治学院記念館大会議室

【パネリスト】

大西晴樹（明治学院学院長）

中島耕二（教養教育センター客員教授）

【総合司会】

岡部一興（明治学院大学キリスト教研究所協力研究員）

恒例となった秋の講演会。今年度は、創立150周年を記念して「ヘボン博士を語る」と題し、大西晴樹先生、中島耕二先生、そして岡部一興先生に講演をしていただきました。

44歳で日本宣教の道を歩むことになったヘボン博士とはどんな人物であったのか。お話はヘボン博士の生い立ち、人間性、女性観などに触れながら、博士の信仰と内面に迫っていきましました。またヘボン博士夫妻が開いた横浜ヘボン塾から築地の東京一致神学校をたどり、白金の地へと至る明治学院の歩みについてもそれぞれの思いを語っていただきました。講演終盤では来場者の皆様とのセッションを交え、ヘボン博士の明治期の日本商業史における功績を取り上げながらその優れた商才に着目し、さらにヘボンという人物を掘り下げてゆく内容となりました。

【講演内容】

岡部一興 先生

- ヘボンの生い立ち●クララとの出会いと海外伝道
- 施療と『和英語林集成』の編纂●共同訳聖書の翻訳
- ヘボン塾に連なった人々、指路教会の創立

大西晴樹 先生

「ピューリタン・ヘボン」

- 禁欲的カルヴァン主義
- ヴェーバーのピューリタン像—禁欲的労働倫理と公平—
- 神中心主義●勤勉●神への信頼、文明観
- 独り息子サミュエルに対する思い
- ヘボン博士の女性観●グリフィスとの関係

中島耕二 先生

「人間ヘボン博士」

- ヘボン家のアメリカ移住物語●ヘボン家の隆盛
- 父サムエル●ヘボン家の人々
- 恩師・学友たち・同僚●クラリッサ・マリア・リート
- 人間ヘボン博士の実証

新着資料紹介

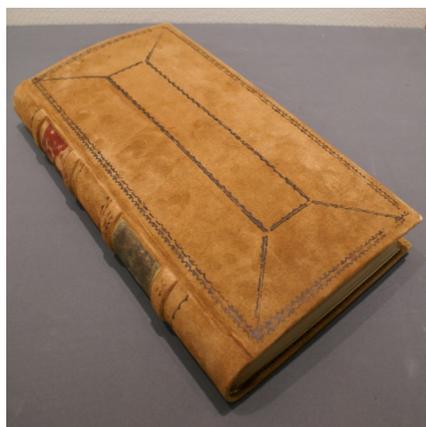
創立150周年を記念し、明治学院所蔵の貴重資料である“『和英語林集成』J.C.ヘボン手稿”と“島崎藤村自筆 明治学院校歌”の2点のレプリカ制作をいたしました。これまで貴重資料のため公開の機会を多く設けられませんでした。現在は歴史資料館展示室にて常設展示をしております。どうぞご覧ください。

『和英語林集成』手稿 J.C.ヘボン筆

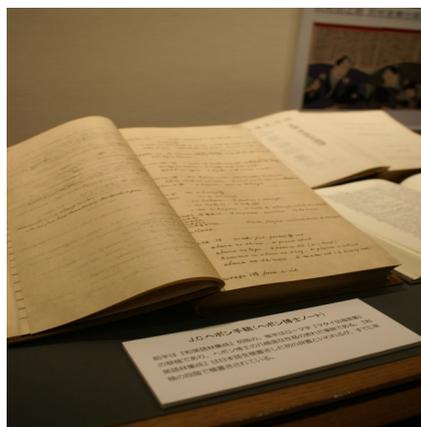
J.C.ヘボンが1867(慶応3)年に刊行した『和英語林集成』編纂のための手稿である。見開き右面にヘボン式ローマ字で表した日本語の語句とその意味、左面に追補が書かれている。執筆年の記載はないが、1859(安政6)年～1864(元治1)年頃と推定される。

語句はヘボン式ローマ字と漢字で丁寧に書かれており、その文字からJ.C.ヘボンの几帳面さと勤勉さがうかがえる。

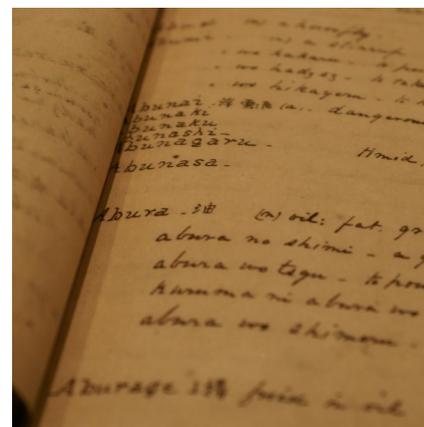
展示室ではこのJ.C.ヘボン「手稿」と『和英語林集成』の初版とを並べて展示しているの、二つを見比べると面白い。



スエード革の装丁



手稿とともに初版も展示している



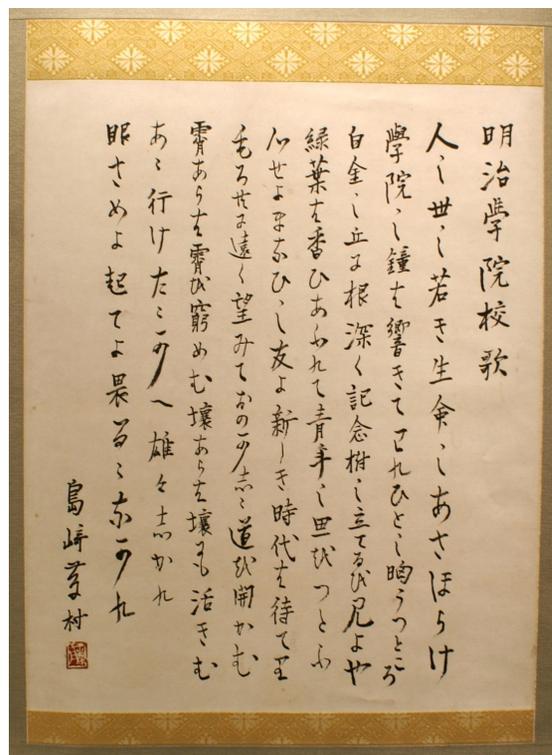
手稿「Abura 油」の項

『明治学院校歌』 島崎藤村筆

明治学院の校歌の作詞は島崎藤村、作曲は前田久八である。1937(昭和12)年に同窓会からの寄贈による校歌碑が建てられた。その制作のために書かれた藤村の書である。こちら展示室にて常設展示しているの、ご覧いただきたい。



校歌と藤村の第一回普通学部卒業写真



毛筆で書かれたこの書が校歌碑に使われた

横浜開港資料館「宣教医 ヘボン」展 共催

「宣教医 ヘボン」展 1万人を超す来館者

2013年10月18日より12月27日まで、横浜開港資料館で開催された同展は、学校法人明治学院が共催となり、明治学院大学図書館と歴史資料館も資料提供いたしました。

展示品の種類は多岐にのぼり、J.C.ヘボンとともに開国直後の日本の様子などもわかる展示となりました。

横浜開港資料館の旧館では、明治学院大学図書館が中心となって明治学院創立150周年記念展示「横浜のヘボン先生と明治学院」を開催し、横浜外国人居留地39番のヘボン邸のジオラマやパネル、所蔵する貴重辞書の展示も行いました。また、横浜シティガイド協会の協力により横浜指路教会や山手ヘボン邸跡などのJ.C.ヘボンゆかりの碑や地を巡る「横浜散策・ヘボン先生の足跡」も開催されました。

総来館者数は1万人を超え、多くの方にJ.C.ヘボンについて知っていただくよい機会となりました。ご来館いただきました皆様に感謝いたします。



「宣教医 ヘボン展」図録

“横浜ヘボン塾”の写真発見

今回の「宣教医 ヘボン展」の図録は、J.C.ヘボン資料の集大成ともいえるものであり、横浜開港資料館で頒布(1000円+税)されています。展示直前に発見された「横浜ヘボン塾」の写真も掲載されています。

この写真は、ジオラマで再現されていた横浜外国人居留地39番のヘボン邸の庭で撮影されたものです。聖書を前にしたヘボン夫人クララの横に、女性19名、男性が42名、さらにベランダにいる男性3名が写っています。安息日学校(日曜学校)の際の撮影と思われる、皆立派な身なりをしており、男女共学であったことや塾の規模もわかる写真です。左後方に写る二階建ての建物は、1873(明治6)年8月に開業したグラント・ホテルであることから、撮影日は1874(明治7)年から1875(明治8)年頃と推定されています。

歴史資料館展示室にも展示しておりますので、白金キャンパスにいらした際には、ぜひご覧ください。



横浜開港資料館所蔵

協力・そのほか

写真・資料提供、制作協力など。



井深梶之助伝

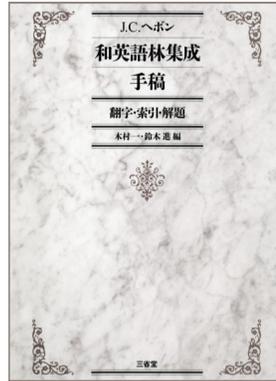
明治学院を興した会津の少年武士

星 亮一

平凡社 2013年5月24日刊

明治学院の草創期を支えた井深梶之助の波瀾の人生を描いた本書。会津藩武士の家に生まれた梶之助は15歳にして小出島の戦闘に出陣。戊辰戦争で会津藩が敗北し時代の流れを痛感した梶之助は洋学を選んだ。

宣教師S.R. ブラウンのもとで学んだ日々や苦勞、キリスト教の洗礼を受けるまで、明治学院第二代総理としての30年間のことなどが書かれている。会津武士から偉大なキリスト者・教育者となった井深梶之助の生涯と共に周辺のキリスト史や明治学院創立の頃を知るにも適した一冊である。



J.C. ヘボン

和英語林集成 手稿

翻字・索引・解題

木村 一・鈴木 進 編

三省堂 2013年5月25日刊

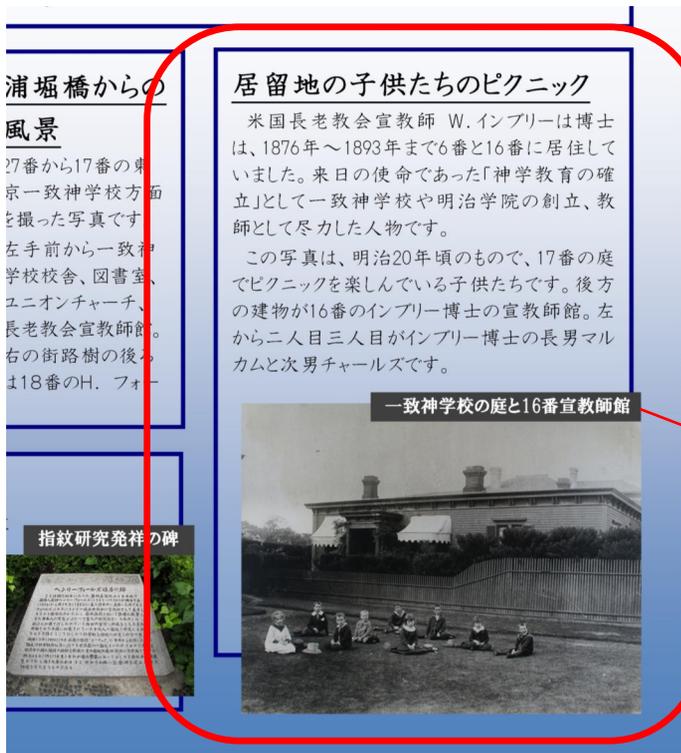
J.C.ヘボン直筆の革張りで重厚に作られた一冊のノートが明治学院大学図書館に所蔵されている。この

ノートに書かれた手稿をもとにヘボンによる日本初の本格的な和英辞典『和英語林集成』が編纂された。本書はこの「手稿」の翻字・索引・解題である。

翻字はJ.C.ヘボンが考案・発明した「ヘボン式ローマ字」で書かれた原文をもとに再現されており、語彙や用例は今日の国語辞典にそのまま掲載されているものも多く、日本語学の研究にも大きな意味をもつ一冊である。

第6回外国人居留地研究会 全国大会 in 東京2013 ポスター展示に参加いたしました

「第6回外国人居留地研究会全国大会 in 東京2013」が2013年11月2日(土)・3日(日)に築地の聖路加看護大学・聖路加病院で開催されました。関連イベントとして10月28(月)～11月3日(日)に聖路加国際病院・聖路加画廊で「築地居留地ポスター展」が行われ、かつて築地外国人居留地にあったミッションスクールや教会などの関連施設などととも明治学院歴史資料館も展示に参加いたしました。



ホープ・カレッジ 140年前の日本人留学生

明治学院大学の協定校である米国のホープ・カレッジは、シカゴから車で約3時間のミシガン州ホランドにあるプロテスタント系リベラルアーツの私立大学で、1965(昭和40)年に明治学院大学から短期留学生が派遣されて以来、半世紀近い交流が続いている。

ホープ・カレッジと明治学院との接点は非常に古く、明治時代にまでさかのぼる。1879年、日本の年号で言えば明治12年、ホープ・カレッジは最初の外国人卒業生を世に送り出した。それは二人の日本人留学生、大儀見元一郎と木村熊二である。二人はいずれも日本に帰国後、明治学院と深い関わりを持つ。

昨年、ホープ・カレッジでは、大儀見元一郎と木村熊二、最初のネイティブ・アメリカ卒業生とアフリカン・アメリカン卒業生の肖像画を地元の画家に依頼し、2月に盛大な除幕式を開催した。この四名の卒業生は、「多様性を包摂する」というホープ・カレッジの理念の象徴とみなされている。肖像画は、“*Celebrating Early Faces of Inclusion*”と名づけられ、それぞれの人物紹介のパネルと合わせて、学内に飾られている。また、『ホープ・カレッジ初期卒業生の横顔 (*Portraits of Early Graduates*)』と題する小冊子も発行され、大儀見元一郎と木村熊二の在学時の様子や帰国後の活躍が紹介されている。

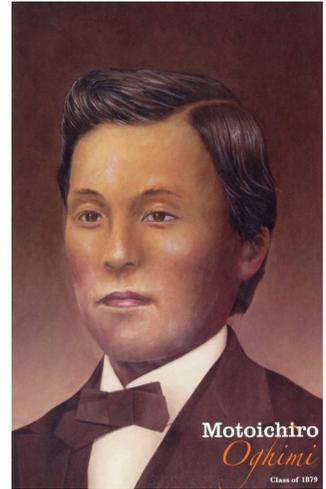
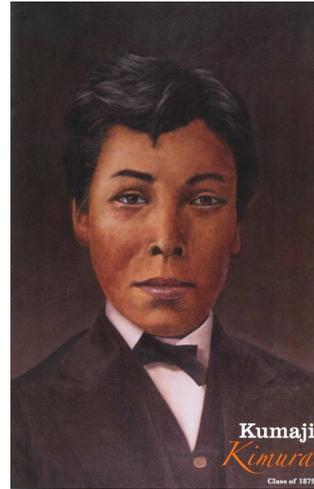
大儀見元一郎と木村熊二は、学問を志し1870(明治3)年にアメリカへ渡った。しかし、十分な留学資金も支援者も持ち合わせていなかった。サンフランシスコから移動したニューヨークにおいて、二人はホープ・カレッジの初代学長であるフィリップ・フェルプス博士と偶然出会う。博士はこの時、大学基金を募る目的で、東海岸に滞在中であった。二人の事情を知るや、博士はホープ・カレッジで学ぶことを提案する。博士が後見人となり、フェルプス家に下宿をして世話を受けながら、大学に通う生活が始まった。そして、1872(明治5)年ホープ教会で洗礼を受け、クリスチャンとなる。1879(明治12)年、二人はホープ・カレッジを卒業し、バチェラー・オブ・アーツの学位を取得した。卒業後は、米国にとどまり、ともに神学校に進んだ。そして、1882(明治15)年牧師の資格を得て、日本に帰国する。

大儀見元一郎は、帰国後、日本基督一致教会麹町教会の牧師をつとめる傍ら、明治学院の前身である東京一致神学校で旧約聖書・旧約文学・教会政治・地理を教えた。明治学院の創立に際しては、財産管理委員・校地選定委員の一人として活躍。開校後は聖書地理と聖地考古学を担当した。晩年は、ギリシャ語辞典の編纂に力を注ぎ、95歳で『新約聖書ギリシャ語邦語辞典』を出版。その翌年に永眠した。

木村熊二は、帰国後、キリスト教主義に基づく女子のための学校として明治女学校を設立し、校長に就任する。また、1888(明治21)年、日本基督一致教会台町教会(現高輪教会)の牧師となり、当時明治学院に在籍していた島崎藤村に洗礼を受けた。後に、木村熊二は長野県の小諸町(現小諸市)に小諸義塾を開校し、島崎藤村を教師として招聘した。

ホープ・カレッジでは、国際交流の分野などで活躍した教職員に大儀見元一郎の名前を冠した賞“Motoichiro Ohgimi Global Award”を授与している。昨年は、国際・多文化主義教育の教員と心理学の教員2名が選ばれた。

齋藤元子(歴史資料館研究調査員)



『Portraits of Early Graduates』より
この肖像画は、マーサ・ミラー・グローバルセンターに飾られている

明治学院歴史資料館 ニューズレターNo. 5

発行者 明治学院 歴史資料館

発行日 2014年3月31日

電話 03-5421-5170

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

E-mail

siryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp

ホームページ

http://shiryokan.meijigakuin.jp/

2013年度 歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長 戸谷 浩・歴史資料館長(国際学部教授)

委員 秋月 望・図書館長(国際学部教授)

長谷川 一(文学部教授)

村井信一(法人事務局長)

徳永 望(明治学院高等学校教諭)

中島耕二(教養教育センター客員教授)

坂口 緑(社会学部教授)

渡辺祐子(教養教育センター教授)

鈴木直子(図書館資料管理課長)

大内俊介(明治学院中学校教諭)

岩谷英昭(常務理事)

【歴史資料館】

研究員 鈴木範久 辻直人 木村 一

研究調査員 松岡良樹 齋藤元子 加藤拓未

事務局 桑折美智代 後藤多麻美 藤田桃香